

研究課題 (テーマ)	新教育プログラム開発・試行・実施支援 よろずレポート相談所 (年次を超えて学生同士が教え合い学びあう教育の試行) (継続)		
研究者	所属学科等	職	氏名
代表者	知能デザイン工学科	教授	野村 俊
		教授	高木 昇
		准教授	岩井 学
研究結果の概要			
<p>1. 実施内容</p> <ul style="list-style-type: none"> ・大学院生(M1)と学部生(B4)が相談員となり、実験、演習、講義のレポートを下級生に指導する場として「よろずレポート相談所」を開所した。学生同士が教え合い学び合うことで、下級生はレポートの質や理解度を、相談員は指導能力や論文執筆能力を向上できると期待した。3年次の学生実験の報告書を重視し、教員に提出する前に相談員に添削を受けることを義務付けた。 ・前期は36回実施した。添削科目は、知能デザイン工学概論(B1)、コンピュータ工学(B2)、パターン情報処理(B2)、知能デザイン工学実験1(B3)であった。添削数は816件、相談員の延べ人数は560人だった。後期は22回実施した。科目は企業経営概論(B3)、知能デザイン工学実験2(B3)、添削数は297件、相談員の延べ人数は105人だった。 <p>2. 教育改善効果</p> <p>2.1 知能デザイン工学実験(B3)の実験報告書における効果</p> <ul style="list-style-type: none"> ・80～90%の学生が役に立ったと答えた(H26年度は約60%)。役立った点として、誤字や図表の指摘、文章の書き方の他、内容指導にも及んでいた。不満として、相談員と教員でチェック基準が相違、相談員のスキルや態度の改善、実施日の拡充などがあった。次年度の継続を望むのは約90%(H26年度は約50%)だった。 ・相談員については、自己の学力向上に寄与し、論文作成のための勉強になったと約90%が回答した。的確に修正内容を指摘できたと思った相談員は約80%だった。次年度も相談員を継続したいと70%が回答した。自身の成長については、レポートの体裁が分かるようになった、読みにくい報告書をチェックし分かり易い文章を書くにはどうすれば良いか考えるようになったという意見があった。 ・教員からはレポートの体裁が整ったおかげで細かな指摘をしなくてよくなり、内容を指導できるようになったことが上げられていた。成績中位の学生で同じ誤りをしないようになった印象を受けた。相談員に対しては、大学院生は成長が見られたが、学部生は成長が判断できない程度であったと判断されていた。 <p>2.2 その他の講義レポートにおける改善効果</p> <ul style="list-style-type: none"> ・1年生や2年生では、60%以上の学生がレポートの添削が役立っていたと回答した。 			
今後の展開			
<ul style="list-style-type: none"> ・学生と相談員の相互にメリットがあったこと、過半数が継続を望んでいたことから、次年度も継続したい。学生からの要望として、相談員のスキルや態度の改善、実施日の拡充、相談員と実験担当教員との連携が上げられていた。教員の要望として、目標の明確化、学生のレベルに応じた対応、相談員の確保が上げられていた。次年度は相談時間の予約制を採用するなど、改善に努めたい。 ・1,2年生のレポートは体裁を良くすることを目標とする。3年生の学生実験は本年度と同様に教員が相談員に対しチェックすべき内容を指導するようにする。 			